

イザヤ書58-60章「主の栄光へ向かって」

1A 主への献身 58

1B 形だけの断食 1-5

2B 良い行ないにある栄光 6-12

3B 主を喜ぶ安息日 13-14

2A 罪の告白 59

1B 全人的墮落 1-8

2B 罪による暗闇 9-15a

3B 主ご自身の救い 15b-21

3A 栄光の都 60

1B 財宝を携える国々 1-9

2B 都を建て直す外国人 10-18

3B 神ご自身の栄光の輝き 19-22

本文

イザヤ書 58 章から読みます。私たちはイザヤ書の後半、主の慰めのところを読んでいます、その後半の中でも最後の部分、クライマックスを読みます。一つの目の区分 40 章から 48 章までは、ペルシヤの王クロスを通して、主がバビロンで縄目にいるユダヤ人を解放するところから、私たちが世からキリストによって救い出してくださる計画を示されています。そして二つ目の区分、49 章から 57 章までが、僕たるメシヤの働きが書かれていました。

そして58章からは、「救いの完成」について書いてあります。神は、ご自分の救いをどのように完成されるのか？それは、神の栄光の宿る御国によって完成されます。神ご自身が光となって照らされる国です。そこで、黙示録の最後の部分、20 章にある千年間のキリストの統治と、21-22 章にある新天新地の幻と似ているものが出てきます。キリストがおられ、栄光に輝く、世界の国々がそこに集まってくるエルサレムの姿です。

1A 主への献身 58

けれどもその前に、神はイスラエルの罪の問題を取り上げられます。最終的な救いを主が与えられる前に、イスラエルの民は罪の悔い改めを行ないます。

1B 形だけの断食 1-5

58:1 せいっぱい大声で叫べ。角笛のように、声をあげよ。わたしの民に彼らのそむきの罪を告げ、ヤコブの家にその罪を告げよ。

前回、57 章を読みましたが、神の宮におけるすべての国々の祈りと礼拝の幻を見せた後で、イスラエルにあった背きの罪を教えました。それは、かつてのカナン人と同じように茂みの所で、忌まわしい偶像礼拝と性的な乱れを指摘していました。けれども、へりくだるなら、その傷を癒し、主はいと高きところで彼らと住まわれる、と約束してくださいました。そして再び、背きの罪を告げると言われますが、そのような明らかな罪、隠れて行なっている罪ではありません。

58:2 しかし、彼らは日ごとにわたしを求め、わたしの道を知ることを望んでいる。義を行ない、神の定めを捨てたことのない国のように、彼らはわたしの正しいさばきをわたしに求め、神に近づくことを望んでいる。58:3a 「なぜ、私たちが断食したのに、あなたはご覧にならなかったのですか。私たちが身を戒めたのに、どうしてそれを認めてくださらないのですか。」

彼らが行なったことは断食でした。「身を戒める」というのは断食のことです。レビ記 16 章に、贖罪日の時に、断食するように呼びかけられています。けれども、イスラエル人は自発的に断食をしていることが多くありました。ある注解には、「断食とは、それに伴う肉体的苦痛を通して、深い罪の自覚と畏れをもって神に近づくことであり、熱心な祈りと悔い改めを表現する行為です。」¹とありました。ダニエルは、ペルシヤの地で主に対して悔い改め、祈りを捧げていた時に御使いが合わせて啓示を与えました(9:3,10:3)。エルサレムに帰還した民は、バビロンによってエルサレムと祖の神殿が破壊されたことを記念して、年に四回、断食を行なっていました(ザカリヤ 8:19)。そして私たちはよく知っているように、パリサイ人は神殿の中で、「週に二度断食し」と祈っていました(ルカ 18:12)。終わりの日、大患難の時にもその苦難の中で断食を敢行するのでしょうか。

58:3b 見よ。あなたがたは断食の日に自分の好むことをし、あなたがたの労働者をみな、圧迫する。58:4 見よ。あなたがたが断食をするのは、争いとけんかをするためであり、不法にこぶしを打ちつけるためだ。あなたがたは今、断食をしているが、あなたがたの声はいと高き所に届かない。58:5 わたしの好む断食、人が身を戒める日は、このようなものだろうか。葦のように頭を垂れ、荒布と灰を敷き広げることだけだろうか。これを、あなたがたは断食と呼び、主に喜ばれる日と呼ぶのか。

つまり、断食はしていたのですが、形だけになっていたのです。「自分の好むことをし」とあります。断食の目的は、今話したように、罪の深い自覚を抱き、畏れをもって神に近づくことですね。しかし、その、神との関係の中で断食していたのではなく、断食の行為そのものだけが残ってしまいました。ですから、自分が雇っている労働者がいるのですが、彼らを圧迫していました。そして、互いに争いと喧嘩をしていました。これは、教会の中でも十分に起こることです。礼拝には出席しているのですが、それが終わればこの世と変わらないことをしている、ということです。

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E4%B8%BB%E3%81%AE%E5%A5%BD%E3%81%BE%E3%82%8C%E3%82%8B%E7%9C%9F%E3%81%AE%E6%96%AD%E9%A3%9F%E3%81%A8%E3%81%AF>

終わりの日について、イエス様はこのような形だけの礼拝を行っているものが、御国から退かれる警告を行われました。「マタイ 7:21-23 わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」「不法をなす者ども」と主は言われましたが、4 節にも「不法にこぶしを打ちつける」とありますね。

イエス様は言われました。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。(ヨハネ 14:15)」主に愛され、そして主を愛する関係の中にいる者は、その戒めを守るはずです。もちろん、弟子たちのように主の御心に反したことを犯すかもしれませんが、それでも主との愛の関係の中に留まるならば、その戒めを守るはずです。ですから、自分の行なっている表面的な行為、それが祈りであれ賛美であれ、何か集会に参加することであれ、そのようなことに熱心であっても、主の命じられたことを行わないで放置したままにいるならば、その人自身が本当に主との愛のつながりがあるか、疑わしいということになります。

2B 良い行ないにある栄光 6-12

58:6 わたしの好む断食は、これではないか。悪のきずなを解き、くびきのなわめをほどこき、しいたげられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。58:7 飢えた者にはあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見て、これに着せ、あなたの肉親の世話をすることではないか。58:8 そのとき、暁のようにあなたの光がさしいで、あなたの傷はすみやかにいやされる。あなたの義はあなたの前に進み、主の栄光が、あなたのしんがりとなられる。58:9a そのとき、あなたが呼ぶと、主は答え、あなたが叫ぶと、「わたしはここにいる。」と仰せられる。

神に対する献身、断食のように、悔い改めて主に立ち帰るような行為には、必ず、兄弟や他者への愛の行為が伴います。イエス様は、律法の中で最も大切な戒めとして、「主なる神を心を尽くして、精神を尽くして、力を尽くして愛する。」ということ語られ、それから「自分自身のように、隣人を愛する。」という戒めを語られました。神を愛するならば、その愛は他者にも及ぶのです。救われるのは、行ないによる信仰によってのみであります。しかし、まことの信仰は行ないが伴います(ヤコブ 1-2 章)。

それは言い換えると、他者に対して義を示し、憐れみを示しているということは、神との正しい関係の中にあることを示していると言えます。それでこれらの憐れみを示しているのなら、8 節以降に主との関係にも癒しが行なわれることが書かれています。闇ではなく、そこから暁が出て光が差し出でるようになります。そして、主の栄光が現れるようになります。祈りも、主がすぐに答えてくだ

さり、そこには主のご臨在があります。イエス様も同じようなことを言われました。「あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。(マタイ 5:7)」

58:9b もし、あなたの中から、くびきを除き、うしろ指をさすことや、つまらないおしゃべりを除き、58:10 飢えた者に心を配り、悩む者の願いを満足させるなら、あなたの光は、やみの中に輝き上り、あなたの暗やみは、真昼のようになる。58:11 主は絶えず、あなたを導いて、焼けつく土地でも、あなたの思いを満たし、あなたの骨を強くする。あなたは、潤された園のようになり、水のかれない源のようになる。58:12 あなたのうちのある者は、昔の廃墟を建て直し、あなたは古代の礎を築き直し、「破れを繕う者、市街を住めるように回復する者。」と呼ばれよう。

時は、ユダヤ人がバビロンから解放されて、エルサレムに帰還し、その町を再建しようとしている背景がここにはあるのでしょうか。そこには困難が伴います。エズラ記やネヘミヤ記を見れば、いかに帰還民が困難の中にいたかを見ることができます。けれども主は、そのような中にあっても、渴いてい時は泉のような潤いを与える。そして町が廃墟であっても、それを回復する力を与えられると約束されています。そしてここで大事なものは、「あなたの光は、やみの中に輝き上り、あなたの暗やみは、真昼のようになる。」ということです。光とは、主の栄光を反映していることです。神が人に初めに与えられた、神の形へと回復してくださっていることです。神に似た者になっていることです。神に倣う者となっていて、神と一つにされていること、これが光輝くことを意味しています。

3B 主を喜ぶ安息日 13-14

58:13 もし、あなたが安息日に出歩くことをやめ、わたしの聖日に自分の好むことをせず、安息日を「喜びの日」と呼び、主の聖日を「はえある日」と呼び、これを尊んで旅をせず、自分の好むことを求めず、むだ口を慎むなら、58:14 そのとき、あなたは主をあなたの喜びとしよう。「わたしはあなたに地の高い所を踏み行かせ、あなたの父ヤコブのゆずりの地であなたを養う。」と主の御口が語られたからである。

前回の 56 章にも出てきましたが、当時のユダヤ人たちは安息日を守っていなかったという問題があったようです。彼らがバビロン捕囚になった理由の一つが、歴代誌第二の最後を読みますと、土地を休ませていなかった、安息年という七年に一度の土地の休息を与えていなかったことが書いてあります。そして安息日、つまり週ごとの休みも疎かにしていたようです。今は、キリストにあって安息が実現したので、私たちが土曜日に一切の労働をしてはならないという戒めを守る必要はありません。しかし、それは安息日が破棄されたことではありません。キリストにあっての安息を堅く守る必要があります。

ここに再び、「自分の好むことを求めず」という言葉があります。自分が楽しいこと、やりたいことを求めるのではなく、主ご自身を喜びとするのが安息の醍醐味です。自分のしていることを止めて、そして主ご自身を喜び、栄えある日とするということです。ネヘミヤも、仮庵の祭りで集っていたイ

スラエル人たちに対して、「主を喜ぶことが、私たちの力です。」と言いました。私たちは、賛美を、礼拝を、また捧げ物を喜ばしいもの、楽しいものに行っているのでしょうか？世の中では、いやクリスチャンの中でさえ、礼拝が何か義務的なものであるかのように格下げされているのが残念でなりません。どんなことがあっても立ち止まって主を思うことは、それは楽しいことであり、喜ばしいことなのです！

2A 罪の告白 59

1B 全人的墮落 1-8

59:1 見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。

59:2 あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

午前礼拝で読みましたこの箇所は、58章からの続きでした。断食をしているのに、祈りが聞かれないという葛藤に対して、「あなたの罪が神との仕切りになっているのだ。」と答えておられます。

59:3 実に、あなたがたの手は血で汚れ、指は咎で汚れ、あなたがたのくちびるは偽りを語り、舌は不正をつぶやく。59:4 正しい訴えをする者はなく、真実をもって弁護する者もなく、むなしいことにたより、うそを言い、害毒をはらみ、悪意を産む。59:5 彼らはまむしの卵をかえし、くもの巣を織る。その卵を食べる者は死に、卵をつぶすと、毒蛇がとび出す。59:6 そのくもの巣は着物にはならず、自分の作ったもので身をおおうこともできない。彼らのわざは不義のわざ、彼らの手のなすことは、ただ暴虐。59:7 彼らの足は悪に走り、罪のない者の血を流すのに速い。彼らの思いは不義の思い。破壊と破滅が彼らの大路にある。59:8 彼らは平和の道を知らず、その道筋には公義がない。彼らは自分の通り道を曲げ、そこを歩む者はだれも、平和を知らない。

これは、とてつもない断罪ですね。「あなたは、こんな失言をしたね。それが罪だよ。」というような類いのものではありません。手、口、足、つまり行なうこと、語ること、動いていくこと、全てにおいて罪にまみれているという断罪をしておられます。つまり、これは何か一つの行為の良し悪しを語っているのではなく、自分の存在、自分のあり方、その心の奥深い部分に至っている罪について主は語っておられます。これをパウロが、「全世界が神のさばきに服する」と宣言した時に引用された、ローマ 3 章の言葉なのです(10-19 節)。これを神学用語で、「全人的墮落」と言います。全とは、全てという意味で、何か良いものが私たちの内に残されているのではなく、まったく全てが墮落してしまった、救いようがない状態のことを指しています。

ですから、私たちの悔い改めは、次に見ていきますが、全人的なものではないといけません。「これをしたのが間違っただけですね。」というのではなく、主なる神の前に出て、自分自身がそこでひざまずき、「主よ、罪を犯しました。憐れんでください。」という全きものなのだという事です。

2B 罪による暗闇 9-15a

59:9 それゆえ、公義は私たちから遠ざかり、義は私たちには追いつかない。私たちは光を待ち望んだが、見よ、やみ。輝きを待ち望んだが、暗やみの中を歩む。59:10 私たちは盲人のように壁を手さぐりし、目のない者のように手さぐりする。真昼でも、たそがれ時のようにつまずき、やみの中にいる死人のようだ。59:11 私たちはみな、熊のようにほえ、鳩のようにうめきにうめく。公義を待ち望むが、それはなく、救いを待ち望むが、それは私たちから遠く離れている。

8 節までは「彼ら」となっているところが、ここから「私たち」に変わっています。主が語られていたところから、彼らはその言葉を受け入れて、自分たちに当てはめています。自分たちが公義を求め、救いを求め、光を求めているのに、それが遠ざかっていることを嘆いています。

59:12 それは、私たちがあなたの御前で多くのそむきの罪を犯し、私たちの罪が、私たちに不利な証言をするからです。私たちのそむきの罪は、私たちとともにあり、私たちは自分の咎を知っている。59:13 私たちは、そむいて、主を否み、私たちの神に従うことをやめ、しいたげと反逆を語り、心に偽りのことばを抱いて、つぶやいている。59:14 こうして公正は退けられ、正義は遠く離れて立っている。真理は広場でつまずき、正直は中にはいることもできない。59:15a そこでは真理は失われ、悪から離れる者も、そのとりこになる。

ここに真の罪の告白があります。12 節には、「私たちが」「私たちの罪が」「私たちのそむきの罪は」と、はっきりと責任の所在を明らかにしています。そして今、自分たちがそうだから、公の場所にも正義も真理もないのだと、やはり自分たちの責任を認めています。

3B 主ご自身の救い 15b-21

59:15b 主はこれを見て、公義のないのに心を痛められた。59:16 主は人のいないのを見、とりなす者のいないのに驚かれた。そこで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を、ご自分のささえとされた。

ここが一番大きな分岐点と言ってよいでしょう。彼らの内には正義がありません。一切、善がありません。そして、彼らの中にだれか正しいものがいて、執り成してくれるのかと言ったら、誰もいませんでした。パウロもローマ 3 章で、「義人はいない、一人もない。」と言いました。ゆえに、神は憐れみに動かされています。心を痛められています。神は一方的な憐れみで、私たちに何も良いものがないことを知っておられるからこそ、ご自身の義で彼らを救い、また私たちを救うことをお決めになったのです。これが、ローマ書に書かれている「信仰による義」の教えであります。神の義は、私たちの律法の行ないではなく、神がご自身の義をキリストにあつて私たちに与えてくださるといふ、転嫁する義なのです。

59:17 主は義をよろいのように着、救いのかぶとを頭にかぶり、復讐の衣を身にまとい、ねたみを

外套として身をおおわれた。59:18 主は彼らのしうちに応じて報い、その仇には憤りを報い、その敵には報復をし、島々にも報復をする。59:19 そうして、西のほうでは、主の御名が、日の上るほうでは、主の栄光が恐れられる。主は激しい流れのように来られ、その中で主の息が吹きまわっている。59:20 「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中のそむきの罪を悔い改める者のところに来る。」…主の御告げ。…

主が、地上に戻って来られます。その時の終わりの幻がここにありますが。かつて、ユダヤ人が異邦人に取り囲まれ、虐げられたのですが、終わりの日にはそれが世界規模で起こります。そこで主は、そのような虐げる者たちを踏みにじることによって彼らに救いを与えられます。20 節が大事です、「しかし」という言葉があります。世界に対して、主は裁きを行われますが、しかし、シオン、エルサレムには贖い主として来られます。自分のそむきの罪を悔い改め、主に立ち帰る者には、その罪を赦し、救うために来られます。ですから、同じ主の来臨でも、一方では激しい怒りの現れなのに対して、もう一方では救いの現われなのです。主に立ち帰る者には救いを、そうでない反抗する者には容赦ない滅びを与えられます。

59:21 「これは、彼らと結ぶわたしの契約である。」と主は仰せられる。「あなたの上にあるわたしの霊、わたしがあなたの口に置いたわたしのことばは、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、すえのすえの口からも、今よりとこしえに離れない。」と主は仰せられる。

イザヤ書 54 章において主は、「わたしの変わらぬ愛はあなたから動かず、わたしの平和の契約は動かない。」と言われました(10 節)。そして 55 章において、主は、「ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ」と言われました(4 節)。主の与えられるその言葉が、とこしえまで続きます。すばらしいですね、主は途中で決して引き離す方ではありません。とこしえまでの救いの手を与えてくださっているのです。

3A 栄光の都 60

そして、60 章は私たちの救いの行きつくところ、すなわち神の御国です。初めに千年王国のエルサレム、それから新天新地の姿があります。ここで知っていただきたいのは、私たちがキリスト者として生きていく時に、何を目標にしているのか？ということでもあります。多くの人が、天国にいて、そこで自分の魂が良い所にいるというようなイメージしかいだいていません。しかし、私たちの救いとは、神の国が回復することです。つまり、罪を犯す前のアダムに神が与えられていたもの、すなわち、人が神の支配の中に入ることによって、自分が地を支配し、その被造物を管理することです。神のかたちに造られた人が、神に被造物を任されて、それを管理している中で神の栄光を現すことでもあります。私たちには今、いろいろなものが神に任されています。神にすがり、神との交わりをし、それで神にあって物事を管理していく時に、そこに神の国が霊的に広がっています。

しかし罪によって、それが損なわれていました。そこでその罪を赦し、取り除き、永遠の命を与えることによって、人を神の国に回復させるのが、「御国の福音」です。福音書において、バプテスマのヨハネ、そして主イエスご自身が、「神の国は近づいた。悔い改めなさい。」と宣べ伝えられました。そしてこうあります。「マタイ 4:23 イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。」彼らは、病気や煩悩が直されて、それで後に来る、罪のない、ゆえに病のない神の国を体験していったのです。ゆえに、60章は極めて大事な章です。

1B 財宝を携える国々 1-9

60:1 起きよ。光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に輝いているからだ。60:2 見よ。やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている。しかし、あなたの上には主が輝き、その栄光があなたの上に現われる。60:3 国々はあなたの光のうちに歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。60:4 目を上げて、あたりを見よ。彼らはみな集まって、あなたのもとに来る。あなたの息子たちは遠くから来、娘たちはわきに抱かれて来る。

この「あなた」というのは、エルサレムのことです。これまでエルサレムまたはシオンが、人格のある者であるかのように語られています。主の栄光が輝いています。それは天から主ご自身が降りてこられました。そして主がエルサレムから世界を支配されます。そのことによって、これまで暗闇の中にいた諸国の民が、光を見つけて、王たちもそこにやってきます。さらに4節は何かと言いますと、イスラエルの地の果てに散らされた民が戻ってくるのです。しかも、わきに抱かれて来るとあるように、王たちの支援を受けて戻ってきます。ペルシヤの王クロスが、全面的な支援でユダヤ人がエルサレムに帰還させるようにしましたが、そのことが全世界的に起こります。

60:5 そのとき、あなたはこれを見て、晴れやかになり、心は震えて、喜ぶ。海の富はあなたのところに移され、国々の財宝はあなたのものとなるからだ。60:6 らくだの大群、ミデヤンとエファの若いらくだが、あなたのところに押し寄せる。これらシェバから来るものはみな、金と乳香を携えて来て、主の奇しいみわざを宣べ伝える。60:7 ケダルの羊の群れもみな、あなたのところに集まり、ネバヨテの雄羊は、あなたに仕え、これらは受け入れられるいけにえとして、わたしの祭壇にささげられる。わたしは、わたしの美しい家を輝かす。

世界の国々が、その財宝をエルサレムに持って来て、それをエルサレムにいる主にお捧げします。ミデヤン人はシナイやアラビヤに住んでいる人ですね。そしてケダルもアラビヤにあり、それで彼らはらくだを連れてきます。それからシェバは、あのシェバの女王がソロモンに贈り物を携えてきましたが、同じように携えてきて、いかに主がすばらしいかを宣べ伝えます。羊を携えてきたら、それは祭壇のいけにえに使われます。いわば、世界にある名産が王なるキリストへ拝礼するために、用いられるのです。主は、へりくだった姿で初臨においては現れましたが、それでも東方からの博士が、幼子のイエス様に黄金と乳香と没薬を捧げました。将来起こることを、予告するような出来

事であります。

60:8 雲のように飛び、巢に帰る鳩のように飛んでくる者は、だれか。60:9 まことに、島々はわたしを待ち望み、タルシシュの船は真先に、あなたの子らを遠くから来させ、彼らの金銀もいっしょに、あなたの神、主の名のために、イスラエルの聖なる者のために運んでくる。主があなたを輝かされたからである。

タルシシュの船です。タルシシュは、スペインの北部にあったであろうと言われる国ですが、そこが当時の西の果てであり、タルシシュの船が地中海をまたぐ国際船であり、国際貿易を代表しています。そして、このタルシシュの船にも、離散のイスラエル人たちを連れてきています。

これらのことは、千年王国で起こることですが、私たちは御霊によって、その前触れを教会による福音の広がりの中で見ます。全く、キリスト教とは関係のない人々がそこにある文化や財産によって、主の御名をほめたたえ、主に捧げ物をする姿を見ます。かつては、全く異教のものに使われていたものを使うこともあります。カリフォルニアにあるカルバリーチャペルの聖書学校は、ミュリエッタ温泉というところにあります。その敷地でかつてはニューエージの人々が温泉に浸かり、酒場もあったようなところを買って、主をほめたたえるところとしています。

2B 都を建て直す外国人 10-18

60:10 外国人もあなたの城壁を建て直し、その王たちもあなたに仕える。実に、わたしは怒って、あなたを打ったが、恵みをもって、あなたをあわれんだ。60:11 あなたの門はいつも開かれ、昼も夜も閉じられない。国々の財宝があなたのところに運ばれ、その王たちが導かれて来るためである。60:12 あなたに仕えない国民や王国は滅び、これらの国々は荒廃する。60:13 レバノンの栄光は、もみの木、すずかけ、桧も、共に、あなたのもとに来て、わたしの聖所を美しくする。わたしは、わたしの足台を尊くする。

ここに書かれているのは、安全の約束です。異邦人たちが、主の栄光のゆえにエルサレムの町を建て直し、美しくしていきます。これは考えられないことです。城壁は、まさにそれら敵どもから守られるために存在するのであり、そして門がいつも開いているという事はあり得ないことです。つまり、敵であった彼らが今や、王なるキリストにひれ伏しているために、門を閉じる必要はないのです。そして、門を閉じる必要もないほど安全で平和なので、さらにレバノンからの杉の木が運ばれて、さらに豊かになります。ちなみに、ここにわずかながら主に仕えない国々があるようなのですが、そのような平和の秩序を壊す分子は、王国時代には滅ぼされます。

この幻も、御国の福音が広がることによってその前兆を見ます。かつて、「神の密輸商人」という本を書いたブラザー・アンドリューという人がいます。彼は、まだソ連が崩壊する前、共産圏に聖書を持ちこんでいった人ですが、彼はソ連が崩壊し、ロシアや東ヨーロッパに福音の戸が開いた

今は、イスラム過激派に福音を届けようとして、ハマスの指導者との接触もしました。イスラエル人の一部の人から批判を受けました。どうして敵と仲良くなるのか？と。アンドリューは答えました。「イスラエルを支え、イスラエルを愛することは、これらイスラエルの敵がキリストにひれ伏すことだ。彼らに福音を伝えることこそが、イスラエルの平和につながる。」テロリストがキリストにひれ伏すことこそ、平和の道です。私たちは社会問題や個人の問題を、解決しようと努力しますが、このように解決の道は、人々がキリストに服することにあります。

60:14 あなたを苦しめた者たちの子らは、身をかがめてあなたのところに来、あなたを侮った者どもはみな、あなたの足もとにひれ伏し、あなたを、主の町、イスラエルの聖なる方のシオン、と呼ぶ。60:15 あなたは捨てられ、憎まれ、通り過ぎる人もなかったが、わたしはあなたを永遠の誇り、代々の喜びの町に変える。60:16 あなたは国々の乳を吸い、王たちの乳房を吸う。あなたは、わたしが、あなたを救う主、あなたを贖うヤコブの全能者であることを知る。

エルサレムは、大いなる慰めを受けます。この都はこれまで、多くの諸国の王に攻められ、苦しめられました。しかし、それら攻めてきた者たち、苦しめた者たちが王なるキリストの前でひれ伏しています。そして、憎まれ、捨てられることもありません。誇りの町、喜びの町となります。そして世界の王たちによって全面的な支援を受けます。こうやって、この方こそが救い主であることを知るので。霊的には、私たちはこのことを期待してよいのです。そして、私たちは世において信仰を持っている時に、同じように敵がいます。必ずしも誰かということではなく、状況であったり、制度であったり、この世から圧力や圧迫を受けます。しかし、全ては主イエス・キリストの下にひれ伏します。したがって、私たちは希望を捨ててはいけなし、勝利の主がいつもおられることを知らないといけません。負け犬根性は、クリスチャンとは正反対です。

60:17 わたしは青銅の代わりに金を運び入れ、鉄の代わりに銀、木の代わりに青銅、石の代わりに鉄を運び入れ、平和をあなたの管理者とし、義をあなたの監督者とする。60:18 あなたの国の中の暴虐、あなたの領土のうちの破壊と破滅は、もう聞かれぬ。あなたは、あなたの城壁を救いと呼び、あなたの門を賛美と呼ぼう。

今、おそらくはエルサレムに帰還して、再建しようとしている帰還民に対して語っておられるのでしよう。それで、将来は必ずこのような城壁になると約束されています。私たちも同じように、今はこの弱い、土の器と呼ばれている肉体に住んでいますが、後には栄光の体に変えられるのです。

3B 神ご自身の栄光の輝き 19-22

60:19 太陽がもうあなたの昼の光とはならず、月の輝きもあなたを照らさず、主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの光栄となる。60:20 あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はいかげることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。

18 節までが地上の千年王国でしたが、19 節からは新天新地の幻になります。他のイザヤ書の預言では、30 章 26 節に「月の光は日の光のようになり、日の光は七倍になって、七つの日の光のようになる。」とありました。けれども今は、太陽も月もないと言っています。それは主ご自身がこの都に住まわれて、永遠の光となるからです。黙示録 21 章を見れば、そのことが書かれています。ところで、ここで興味深いのは、主は初めに造られたものを回復されていることです。創世記 1 章では、第一目に光が造られ、第四日目に太陽や月、星がつくられています。では一日目の光はどこから来ているのか？ということですが、それは主なる神の栄光であると言えるのです。神の元々の創造の秩序へと神が最終的に戻されるのです。

60:21 あなたの民はみな正しくなり、とこしえにその地を所有しよう。彼らはわたしの栄光を現わす、わたしの植えた枝。わたしの手で造ったもの。60:22 最も小さい者も氏族となり、最も弱い者も強国となる。時が来れば、わたし、主が、すみやかにそれをする。

ここに、人の最終的な姿、完成された姿が書かれています。正しくなったとありますが、これは神との関係が完全に正された状態です。そして永久に土地を所有、つまりアダムの時に神の与えられた約束がかなえられています。そして、神の栄光を表しています。したがって、私たちは今、それに向かって生きているのです。「2コリント 3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」それで、今の世との比較をしています。今の世では最も小さい者とされている者も、弱い者とされている者も、後に来る世では逆転されます。

そして、この幻を今、しっかり持っていなさいと勧めているのです。「時が来れば、わたし、主が、すみやかにそれをする。」と言われていました。ちょっと待て、これはずっとずっと後のことでしょう、と言われるかもしれません。けれども、私たちキリスト者は、まさに新天新地の幻を自分が信仰を持った時に与えられたのです。「2コリント 5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」全てが新しくなったというのは、新天新地における言葉であります。

ですから、御国の到来を思って歩みましょう。御霊に導かれ、自分がなくなり、キリストがあがめられる時に神の栄光を輝かしています。そして御国の福音によって、私たちは後に来る世の前触れを味わっています。そしてその証しを周りの人々にしています。そこで大切なのは、信仰による義であり、その神に愛され、神の憐れみによってのみの救いから、良い行ないが出ているということでもあります。